

NPO 法人サロベツ・エコ・ネットワークの長谷部と申します。私たちはサロベツを中心とした宗谷地方で環境保全活動等を行っている団体です。

まず基本的な考え方として、私たちは風力発電による自然再生可能エネルギーの利用の重要性を認識しております。ただ、欧州などの自然再生可能エネルギーの先進国の例を見ますと、風力発電事業を行うに当たっては、地域の自然や産業と共存することを目的としたゾーニングを元に、適地を選定した上で事業計画が進められています。しかし、国内においては、自然再生可能エネルギーの推進が図られているにもかかわらず、現在まで調査に基づいたゾーニングの選定が行われていません。宗谷・留萌地方においては風況の良さや送電線の設計計画を元に、住民や利用者・地域の団体が懸念する影響が十分に考慮されないまま、無秩序に事業計画が進行しております。この状況の中で、経済産業省は環境影響評価の審議期間の短縮を推進しているようですが、現状で明らかになっていない風力発電事業による野生生物への影響、人畜への健康被害、観光産業への影響を総合的に検討するためには、全体的なゾーニングを行った上で、むしろ慎重に審議するべきと私たちは考えています。

道北 7 事業の環境保全の見地から、様々な項目について意見を述べさせていただきます。

まず、情報公開についてですが、準備書等は今後いつでも内容を精査できるようにインターネット上でのダウンロード・印刷を含め随時閲覧可能にさせていただきたいと思っております。資料の情報公開は環境影響評価を行うにあたって関係者の同意を得、事後調査結果を検証し、その知見を今後の他の事業に生かすために不可欠なことであり、事業者にとっても有益であると考えています。資料の閲覧に制限があることは関係者との信頼関係を構築するにあたっての障害になるだけでなく、不要な不信感を生むことにつながりかねません。

次に景観についてですが、利尻礼文サロベツ国立公園とその周辺には、国内最大の高層湿原があり、巨大な建築物が存在しないため、利尻富士だけでなく広く何も無い景観を求めて多くの方が訪れます。道北 7 事業による 231 基の風車建設計画が実施された際には、地域に多くの風車が建設されることとなります。景観・植物・鳥類・哺乳類などいずれの目的の写真愛好家にとっても、人工物は邪魔な存在であり、宗谷地方の観光資源である景観が大きく損なわれる可能性があります。

例えば、勇知風力発電事業予定地（以後風力発電予定地を省略）は海岸に近い場所に立地しているため、大沼、ふれあい公園、メグマ沼の観光地から利尻富士が見える空間に風車が入り景観を損なうことが予測されます。ここでは現在も稚内市の風車が稼働していますが、近々耐用年に達した際に更新されず取り壊されれば、景観が回復され、観光資源としての価値が回復します。また、景観は主要な観光地や集落からだけでなく、車や鉄道等

で移動中に車窓から見える景観を損なうことが予測されます。例えば、勇知では稚内から天塩にかけてのオロロンライン沿いの海岸草原の風景に風車が入ることです。稚内市では今から10年以上前に、他の地域に先駆けて風力発電施設建設のガイドラインが制定されました。ここには自然保護上の問題から建設が望ましくない場所として、勇知を含む西側の海岸沿いが設定されています。今後を見越して景観など自然環境の重要性を考慮して設定された先見的なガイドラインですので、これを遵守しいただきたいと考えています。自然環境の重要性は不変なものですのでこの区域について変更されることはないと思いますが、万一変更をお考えの場合は、自然環境の最新の知見をふまえた上で、建設が好ましくない地域を増やしていただきたいと思っています。

豊富町の稚咲内の砂丘林からサロベツ川に出たあたりやそこからカブト沼へ向かう道の高台からは東の方角にサロベツの湿原とその向こうに芦川の丘陵が見えます。ここに風車が入ることにより広い原野とその向こうにある丘陵のすばらしい景観が損なわれることが予測されます。

この地域の景観の中でもサロベツ原野周辺から望む広く巨大建築物がない風景は国内で類がないものであり、一般的な景観評価方法はあてはまらないと考えます。ここから芦川・豊富山の風車がたとえ少しでも見えることにより、サロベツ原野の景観や観光産業の価値が大きく損なわれることが予測されます。

豊富山周辺は昔から歴史映画の戦場ロケ地となっており、最近では大河ドラマ坂の上の雲のロケ地として利用されました。また、豊富温泉に近い大規模草地として丘陵地の景観が広い牧草地の風景や星空の観察地としてとして現在も利用されており、風車の存在やそれによる夜の照明は今後これらの利用ができなくなる、または大きく損なわれることによる観光資源が損なわれることが懸念されます。

以上から、私たちは特に勇知・芦川・豊富山については景観を損なわないための大幅な計画の変更を求めます。

現行の環境影響評価の方法は、観光産業などによる経済的価値が評価されていないことが問題点です。風車が観光資源になるという話を聞きますが、まだ風車が珍しかった頃とは異なり、現在は珍しいものではありません。私たちは昔からあり、これからもずっと利用可能な独特な景観やそこに生息する動植物を大切にしています。宗谷・留萌地方周辺における風車の無秩序な存在は、その景観を損なうものと考えています。

次に鳥類についてですが、利尻礼文サロベツ国立公園を中心とするサロベツ原野は国内を代表する多くの絶滅危惧種を含む貴重な野生生物の宝庫であり、重要野鳥生息地（IBA）に登録されています。特に渡り鳥にとっては国内有数の重要な渡り経路であり、水鳥にとって国際的に重要な中継地であるラムサール条約湿地に登録されています。5種の天然記念物（タンチョウ・オジロワシ・オオワシ・ヒシクイ・マガン）の重要な生息地でもありま

す。

鳥類の中で風車による影響が最も大きいと考えられているのがオジロワシ・オオワシです。宗谷地域周辺は両種の越冬地であり、中でも宗谷岬は主要な渡り経路でボトルネック（ガラス瓶の先のように狭くなった場所）に当たるため、多くの個体が集中します。それらの個体は上昇気流を利用するために風車建設予定地である尾根上を高頻度に利用します。従って、宗谷岬に近い当地域における風車すべてでバードストライクのリスクがあります。その中でも勇知・川西・芦川・川南・豊富山は繁殖期に高頻度に利用されている場所です。勇知・川南には周辺に巣があります。

増幌・樺岡には、冬期のオジロワシ・オオワシの主要な採餌場とねぐらがあります。季節になると、両種が川沿いや周辺の尾根で姿が常に多く確認されているため、風車への高い衝突率が予測されます。準備書でも年間衝突が最も高い0.9羽と予測されています。おそらく日本で現在計画されている中で最もリスクが高い場所です。適切にゾーニングが行われていれば、真っ先に除外されると思われます。周辺にはオジロワシの巣があり、繁殖期にも高頻度で利用されています。

計画地の近くに偶然巣が発見された訳ではなく、当地域全域にオジロワシの繁殖地が分布しています。事業者は風車を繁殖地から500m以上離すとしていますが、これは建設工事の際に営巣を放棄しない距離の基準です。風車の場合はバードストライクがあるため、半径数kmの行動圏を離す距離として設定するべきと考えます。巣に近い場所では常に風車へ衝突のリスクにさらされており、巣から採餌場への移動時に、風車からの回避した場合も常に余分なエネルギーを消費することで繁殖への悪影響が予測されます。

稚内市では今度道東地方の成功例に習ってバードウォッチングを重要な観光資源にする計画があります。その中で目玉となるのが宗谷岬におけるオジロワシ・オオワシの渡りと増幌・樺岡における冬期の両種の観察です。重要な越冬地や渡り経路における風車がある風景はバードウォッチングにそぐわないですし、苫前町の海岸沿いの風車のように重要種の保全上の問題が起こることが懸念されます。

以上から芦川・川南・豊富山、特に勇知・川西・増幌・樺岡はオジロワシ・オオワシへの影響が著しいため、ゼロ・オプション（風車を建設しない選択肢）を含む事業の大幅な変更や、高頻度利用時期における風車の停止などの実行力のある対策が必要と考えます。

宗谷地域は日本とシベリア間を渡るヒシクイ(5千羽)・マガン(4万羽)・オオハクチョウ(千羽)・コハクチョウ(五千羽)の国際的な中継地でボトルネックにあたります。これらの種は事業予定地全域を渡り経路として利用していますが、当地域における風力発電事業は渡り経路のほとんどを塞いでしまうほどの規模で集中して計画されています。中でも勇知・川西・樺岡・川南・芦川風力発電事業予定地はこれらの4種の主要な渡り経路です。特に川西事業予定地はハクチョウ類がサロベツから大沼のねぐらに抜ける際の主線上にあたります。事業者は準備書ではこれらの種は風車を回避するとしていますが、回避経路で他の

事業者が風力発電事業施設の建設を計画しているため、個別の事業から累積的影響を評価することは難しい状況です。このためすべての事業の準備書が出そろった時点で環境影響評価すべきと考えます。事業によりこれらの種の風車への衝突、渡りの阻害が予測され、最悪の場合、中継地の変更が懸念されます。近年マガンの個体数は増加傾向にあるため、中継地としての重要性が増しており、個体数が多いのでより大きな影響が懸念されます。また、現状ではこれらの種の渡りの実態が十分に解明されていない状況です。これらの種は夜に多く渡るため、これまで調査をすることが困難でした。それを把握するための効果的とされているレーダーによる調査手法はまだ確立されていません。今後の調査結果によってはより大きな影響が予測される可能性があります。レーダー調査はこれまでほとんど明らかになっていない小鳥の渡り状況の把握にも有用である可能性があります。

以上から勇知・川西・樺岡・川南・芦川風力発電事業はヒシクイ・マガン・オオハクチョウ・コハクチョウの渡りへの影響があると考えられるため、事業計画の変更または渡り時期における風車の停止などの実行力のある対策が必要と考えます。

宗谷地域では近年特別天然記念物のタンチョウの繁殖が確認されるようになり、繁殖つがい数が増加傾向にあります。これまで道東地域に集中していた繁殖地の分散の観点から、当地域における繁殖地としての重要性が増しています。実際に採餌場所への移動や渡り時に、増幌・川西・川南風力発電事業予定地周辺上空で姿が確認されています。当地域における風力発電事業の集中により、今後、タンチョウの風車への衝突もしくは移動の阻害が予測されます。現在数つがいの規模なので、仮に衝突した場合に影響が甚大になります。今後は渡り・移動経路を含めた動向を見守り、繁殖地が拡大した際には新たな実行力のある対策を行う必要があります。

次に哺乳類についてですが、風車への衝突が最も懸念されるのはコウモリ類です。風車への影響に関する調査方法が確立されていないので、現状で影響を把握することは困難かもしれませんが、海外や国内でバット・ストライクが確認されているため、今後調査手法行政・研究者・事業者などが連携して開発する必要があると考えています。

風力発電事業により景観だけでなく、静かな環境の中では絶えず聞こえる風車の回転音による騒音の問題も懸念されます。当地域は多くは車が走っていないければ、騒音がほとんどない場所です。ブレードの回転音により騒音があることによって、鳥や虫の声などが聞こえにくくなるだけでなく、観光資源ともなる静かな雰囲気が損なわれます。特に、勇知風力発電事業予定地近くの海岸草原や豊富山地近くの牧草地における騒音が懸念されます。

次に土地の改変についてですが、この事業に使用される風車は大型であるため、風車 1 基あたりの改変面積が他のものより大きくなっています。当地域は酪農地帯であるため、西部の森林面積が少なく、まとまった森林は丘陵地などの一部に限られています。芦川・

豊富山・勇知・川南の限られた森林が改変されることによる既存の生態系への影響は大きいと考えます。特に増幌など林道がないところでは影響が著しいと懸念されます。

準備書では事業者がガンカモの渡り調査をはじめ、比較的高頻度に鳥類調査し、新たな知見を明らかにしてきたことを評価します。ただ、その環境影響評価ではすべてにおいて影響は少ないとの結果でした。この地域における現状を鑑みれば、すべて影響が少ないと結論づけるのは難しい状況だと考えます。現行の計画で影響が著しい部分についてはゼロ・オプションも視野に入れた上での計画変更または、影響が著しい時期における風車の停止などの実行力のある対策が行われるべきと考えます。

私たちはこれからも当地域のすばらしい景観や野生生物を保全し、それを有用な観光資源としてずっと利用し続けたいと考えています。事業実施後に問題を生じさせないために、稚内市にすでにあるガイドラインに野生生物に関する新たな知見を加えた上で、関係者の意見を踏まえてじっくりと時間をかけて検討し、自然や産業との共存を目的としたゾーニングを行った上で、風力発電事業の適地を選定して欲しいと考えています。

以上です。